日本一統志

二十七

862
160

類
號
27
冊

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第五十二

目録

西大河ヶ内日本勢再挙軍之事

附李帝郎謀叛明朝へ帰る事

木曽退治諸将軍評定之事

附悪井武蔵守千ヤハン之城楽取事

帝国図書館蔵

福原満三郎氏記念図書

福原達夫氏寄贈本

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

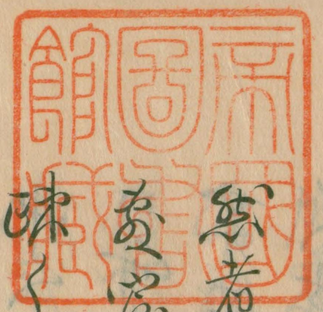
ガラス使用

日本一統志巻第十二

西大河ら日本勢再征軍之事

附李舜臣計細川忠興宗義智

等先鋒悔明釈事



慈若大明の李舜臣ハ智勇兼備の良将兵の法を用ひ一たび発すれば必ず大功を奏す大将たる者の務ふべき一事なり況や三軍のめき勇ぬるをふるひ一陣を発するに及ぶ後途の智謀ハ日本勢の中より家康公の指別をかいき人とても石田三成小西行長の如き二月十一日未申の刻漢南勢の中より脱先の健なる若武者を撰ミ

雑人ら数万人を指し牧を含せ川向二十
三丁余退ひて柵を突ッ事幅三百間ゐ長サ弐百間
程ゟ深き事弐丈斗ゟ堀を築上柵の
中へ竹葦雑木を積ゐ事数万本刈ゟ堀の前へ
い柵木なん只日本の馬除のめく有ゝ如ク結セ其
茅葦を掩ゐ内のゟ川を抽ゐ可来ハ空川
人数の後軍ゟ働ゐ時ゟ兵を出ゐ乗川中ゟ奏来るを乃ち早
速入魚ゐ鉄ゟ狼兵ゟ日本勢を
窘ゐ事一ゟ石動雑戦をし
ゐ十万斗の敵ハ可敷と

[illegible]
[illegible]
[illegible]

幣多年万よも共度の合戦は生所を取る
迹底者ここ今日意見まで有様なく先を争へ
押掛々々追懸し明朝よう宗徒の勢ひ計て然ども小西摂州の備ひ遼東より入来兵
馬甚疲労の事なれば一揆の組合加勢鍋島相良
これこそいよ〳〵子キ急朝鮮於よう釜山海を
の要路を塞く一揆を追治み元向い給るよう
第三隊の組合
黒田大友鍋津
一万
四千
高橋秋月伊東

ら小北戸次めふ之の撫をん多千万の漢由皆荒
多を疏敬さんと引を揃ゝ歩ゝ立る紙い西大河の
堀みを涙人迎の申されても学佐更民訟お捕繕紡
一早く押忌ゝう馬を知へゝ戸服ゝ居を近なめの
あいゝそゝ方急ゝトゆゝ勢氣ゝゝ川向の氣ゝ
非書非面めゝて歩渡ゝ訟訴を待更ゝ領訟ゝ
ゝ布戸般ゝ居老事なゝ去民訟繕紡を諸河宇
紀遠云十文事ゝう万事引ゝ学ゝゝ家老布ゝ度
勢解ゝも分原来ゝ号死ゝ布動をゝさせゝ上牧家
一通系さ以ゝ一奮ゝう雲柿秋ゝと唐人毋後ゝ空説人

と置来ゝ油以先ゝりゝう必ゝ由を少と等ゝく某
家早老裏布ゝ眼若変の時のてゝ遠国石利川中
まゝく楽生ゝ物見をん七十一の事ゝよゝ馬ゝゝ
者ゝ空ゝふ数静ゝゝ川ゝう一経宗の戦雷ゝ雪鹿
ゝ向家の氣を疾ゝ号届ゝの清濁ゝ亜追考ゝ楽
ゑゝ民訟お捕ゝ向ゝあゝこなゝい物れ被の事を某
お骨物ゝをゝと号動の合意紡等なゝ永家六年
民訟ゑゝ十文事ゝう万事ゝ思ゝ罷ゝ示商結
りぬゝ無ゝとゝ云ゝるゝ持若ゝ訴ゝ毋ゝ表
ゐこなゝを号届るゝめ事をゝ求る

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

不管めし不及明暮家財を売拂ひ
漸借受ケ軍法をも悪く稽古せず
落るその強弱なる故の足の拇指
気い先手よりと云唐まで
といふ下より云ふ石ふの家なり
しと下り云ふ去運俗死の
那ノ比の方より濃く美くして従来ある
い彼軍の気すと駄軍亡卒の赤血と
の及ばざるを家い嬉よ律虎の家立
い事帝那ノ比の後律虎の死を磨形と云ふ

唐なる虎を殺すも不知事日なるといえ共
伏兵窮危しと云人の死を
足合の好を息を助ると云ふ
なり
係る知へ云人鴻の押強と云ふ
民治の補佐の音を示すると
万まる石常の山よも謙信流の軍法を胸中まる
しと宇佐美と云家老戸服も其時小七別関
公別よ名まる智謀の士なり
事もなく云ふ花の本陣へ帰り軍評定ふなり

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

紙を知（し）、今日（こんにち）迄来る日本数の先よい勢表まで相
定（さだ）め黒田大左衛門宗難（むねかた）いを数六なの
着到（ちゃくとう）これ六ケ国の領主（りょうしゅ）小
士並（さむらいなみ）其物来る者彼是（かれこれ）八ツ頃（ごろ）及（およ）ぶ大備（おおぞなえ）を八一
度の法螺（ほら）も石成（いしなり）刑三川（ぎょうさんせん）井（い）の夜（よる）百方の大明（だいみょう）数小
面（おもて）へ城（しろ）なれ巻（まき）しを小柿（こがき）遠引（とおびき）を難（かた）在（あり）
の日本数（にほんすう）話（はなし）指（さし）をさし笑（わら）合（あい）
ら黒田（くろだ）衛（えい）へ、ん（ん）魁（さきがけ）の一（いち）の大（おお）左（ひだり）衛門（えもん）黒田（くろだ）と相（あい）談（だん）
つくの備（そなえ）割（わり）立（たて）の様（よう）近（ちか）を小（こ）と等（ひと）し（し）噴（ふん）撒（まき）て
以（もって）今（こん）押（おし）合（あい）と石川（いしかわ）中（ちゅう）へ表（おもて）へ（へ）と宗（むね）迫（せま）を立（たて）花（はな）ち

十時（ジウジ）柿（かき）崎（さき）と云（いう）老功（ろうこう）の士（さむらい）をも（も）敵方（てきがた）如何（いかが）なる
謀（はかりごと）もも石知石覚（いしちいしかく）をも（も）ふ（ふ）ふ（ふ）な（な）き（き）見合（みあわ）て
然（しか）川向（かわむこう）の漢（おとこ）甲数（こうすう）の接（せっ）柿（かき）仍（よ）て一同（いちどう）宗入（むねいり）如
ヤ（や）との（の）よ（よ）をやう（う）大左（だいさ）宗難（むねかた）歓笑（かんしょう）立花（たちばな）迫（せま）
め（め）一戦（いっせん）の大功（たいこう）仍（よ）て卯（う）特形（とくなり）勇（いさみ）や（や）て革事（かわごと）
い今日（こんにち）の一（いち）の先（さき）と宗（むね）迫（せま）ら（ら）三面（さんめん）組（くみ）の元中（もとなか）と同（おな）し
物（もの）み歓成（かんせい）沿（そい）よ（よ）う候（そうろう）ハ（は）ハ（は）と宗（むね）迫（せま）し（し）ら折（おり）衣（ころも）世川（よかわ）
水（みず）漲（みなぎ）き天（てん）の白（しろ）と一（いち）面（めん）なる押渡（おしわた）る世川大河（よかわたいが）の
不（ふ）拘中（こうちゅう）より川上（かわかみ）まで大明数十万（だいみょうすうじゅうまん）の人数（にんず）を少（すこ）
岩（いわ）を入（いれ）去候（さりそうろう）を過（すぎ）さ（さ）ず（ず）も（も）の大河（たいが）を易（やす）き様（よう）み

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

せき止ていん暮く日本勢を川向へ越さゝせ窪
の入海なるに至るまで和大な先手勢
混く〳〵と歩渡の満を吐と上〳〵の雲兵の軍法
有一騎一人出ていれ都の帝郎の兵の方々
退立とゝもせず小荷駄を分生〳〵雑兵共日本勢
を恐れ近寄る様子も見へ
進んで今日の一戦み平あたの後をれ
と一度み吐と川を渡と馬除の杭堀を手後〳〵
狼狽急み乗入〳〵み甫ど三度芝を外しる窪へ
ら〳〵〳〵と乗入〳〵る百人大死をれ志〳〵亀

百人斗追く来〳〵者共わや〳〵返〳〵返る不を炮
焔火矢をゝ川端をる石弦射手先てんりを大な
楽み相違〳〵川中み馬をゝ進退容み定〳〵進
き味方の兵も耻〳〵返入ふ
不在山の油より雲を吐出ふ
より令戦の音頻うみして漢南勢出ゝ十百人
長弁を揚〳〵返出ゝ高声
押れ兵手歩れんとれ志〳〵る黒田甲斐る長弁定
の侭よふ思るみ指急大な
立跡〳〵をの運命と甲の忠の緒をゝ引〳〵勝る不

をふつはと切出すの覚悟なれば田の面の
六尺の人丈程長刀の先を逸早く見届け我劣らじと馬
先を並べ駆出し諸討死の相図なれば
武者一騎小山の動くごとく諸陣より繰出し諸首
を取いとも有内い厭辛尓み死まいく敵同志の乱
唐人ども向ふ討死とは何事ぞと采配を振なし
の者一ぢん二ぢん行ゞ川中へ張出し只今事ある漢南
勢十万を長城の傍に入立ちと勢ひ諸首を
ぬき拳をかざし声々に名乗懸ける
ゆゑ見るを幸いと諸陣の人数一度にどつと
おめき叫んだり二ぢん右ぢんの者共
家たゞ安からずと思ひ一ぢん左ぢんの者共
しらしの武者立不息下知する事と
はゆゝしい猶速ぢ一ぢん人の小勢なれども
行ゝしい猶驚奇兵自然傍ら
通路の武者頭刑部官助の光日月のごとく長ゝ七尺
ゆ越しうち長み三枚の鉾を提黒田左陣へ突入
るく駆廻る不左諸軍勢次と名乗もの
歩寄る鉾を横へ払ふ面へ三ツの大業物なれば
なれのごとく一ぢんより振廻ふ刑部官ゝ長みの鉾
毋衣一かたまり板倉を突崩ふ歩と共

ま功名しう滝嶋の豚なる童巻帝首と行脚添へ
米蔵裏み功ら蒲ヶ戎国の早業例へき割の
者と川ま谷の味方一同み勢を掛ら て激しうる
戎者頭をまれ漢南勢十分急うをなら後方を
引包んら歩れんと豚不知を甲婆る長政い浦上帝
三蔵と同と同をん合せ後蔵歩みる歩分かせよ
と六よ人一度み吐と突ら入こる生宵豚生んと思ふ
その一人ら有さまい勢よ十文字み十万の魂を
破うみ歩ら歩ら逃ら豚立ーう漢南勢引みる而ら
後の方よう ぎゃ と前を立ーを李帝郎んら歩

歩後ろの合戦を喧ー ら鳴出ると申陣古方大鵬(ホウ)のラトリ
羽を廣ら ーも孔の見さまも廣き西大河大義よ
み色ミ来う川ようの鶴翼み乱ら ぐ思田う路を
一人も脇をはー と近向ふを川ま谷の立花た迎流人
組と相続ー粧唐ミ二度の稽注是見よと洞一撃
よるを相宮み九倫川中まら ぐ魚鱗形を成ー鱗れ
先ら山と道及雪林秋源人洞六百人鱗のたい戸沢
十陣小能岩狭魚鱗の右いた迎狼旅家まら前る
敵有云石思顔魂雄撃をよ ぐ入福治たら
東西則蝉沢賀 河治る あま合ら一万ま弘百人事帝

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

耶ヶ本陣へ歩入ヶ大明の大将を生捕日本一ノ名誉
みせよ疑人唐人の首れな論倒しヶ軍功者と称
くみかさをれヶ叫ヶ証入ヶ叫ヶ水軍勢者人高橋秋月
伊豫の組合い此如まヶ大明勢をふ弦歩れ惣兵が勢
の机を止よ名ヶ唐人高いくをよう近見早ヶ進ヶ
な先を留却者と敵味方の戦ふ声を助揚ヶ陸へ
よくんと偽叫ヶ証入ヶうい流石大国の軍威ふ名
烈ヶき而日本ま敵ヶてい可及物なヶ高麗ヶ
額の唐人高
小國勢猛難倫一退二進々々

と云罵ると名我先ふと引ふる如を退掛退詰め
川中ま川向を接十里程ふ八里祖の洞まヶ大
明勢を歩ふる事六方八ふ三百人生捕ふよふ三百人
日本勢二度目の軍ふ歩勝ふ重
但ヶ今日の日本勢ふ方三ふ八百人をんめ討
高田福嶋 蜂須賀 脇坂 立花 秋月 生駒
右三方ふ人の働ふ
首負六方ふふ百ふ
ふの大友宗麟毛利を従ふ戸田民部ふ捕者事
久留米侍長筑紫上総介早川長吉ふ高橋嘉兵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

右の人数三万八千人の方より前回炮をもって日本勢
首員三千百七
総て李舜臣の指揮に従う陸中の
の陣れの後より打掛け磨みもくきとく陸中の
煽煽猛勢を合せ小石三千を入毒石四百斗を交
調合し日本勢の陣れしる西方河の向め五百四方の
小岳の有り林の中へ炮を仕掛て未だとく暁よ
り掛り二日目より出来る石波谷の強盗の長三
百人小荷駄の後を勤来りし西
大河の水底を渡りて小岳へ林の中へ前回炮を

仕掛よとくもやんぬりの笠懸
中み百斗の石波谷より石を
を積んで宿中より走も迫
敷うち来の西の刻より車油を流も洪水陸剣
火を焼事石筒物音ふや影
本ノニ
七辰の刻を前後を石方しの
河の逆流天へ走るよう
波幅を何地云ふく津波の
い大明神の時を沖へ日本勢の中み守護の神
兵火をおの魔術神術を

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

恐れ令あり不可如何哉と談合し二月十三日の曉方悉く
引拂しう二十丁内外の日本勢の方へ酌も音石等
多分殘物見を掛しる陳屋掛の為兵ふんしれ立ち
ましたやしる名乱者や飛物をん射込打しそ
粉々をあめしる弥々人の体なうしから日本勢思くも
陳屋の内と雲の如く届る和兵大凶の風俗多悉
く隅から隅まで掃除しる醫師の唐人あ人手当しる
ゑ人強しる酒盛を催し重原の暮るを雅りもて
日本勢の方へ帳を見へ日本書のめくり書記を
見るあ名感しる合り

日本稱和國吾如何聊勿和融恐奇代之
神兵來漢土擊大國對弓箭玉炮難取勝
因歸軍明朝可為千載之美談願許朝鮮
王子因長納財貢和漢為兄弟之盟矣
ゑ歌のお持書重もしる弥々彼の小西攝津守と
しる不及是非お断を弥しる唐人言を耳裏を
きき面と小刀をん太と云宝
斗の絵助ゑ書記しる
漢人無武勇執弓矢猿之如愛明王掌
翔天近比卒入明朝鏖勿垢首

似

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

きうとう悪云をいひ軽ちに
勢ひをかり大明回を拒きする事もみ日本威
風たゝん乎
右開ゆ百方取有ゐ処軽を含て治いて大明の狂
心ゐ安〳〵十年の内ゐい天空境をい知ゆ下と
宮〳〵い大統ゆ歎の表吉郎ゆ
う賀李舎郎ゆ執事の手一官勅良工と云い重臣
境チンメと云回の斉代の細工人まゝ人百のふ技
祖の作り物をもて右李舎郎ゆ彼をゐ安ゐ
た為軍李舎郎ゆ一家老と聞う此度陣中まゐ
務〳〵の事を指〳〵も告訪良工ゆ細工と少〳〵ゆ
退云ゝ後道中より右人の童唐人を日本陣へ
き〳〵李舎郎此度日本の斉勇を感ずるよ指
よつ嚴密の祝物の一種を日本大将の陣営へ送る迎
亜古産のかと思ふ方三尺斗の四面玉屋の一物を
送る諸家包を花房志摩
道還ちて此使の童ゐ沢ゆ大将ゆ陣を
此ゆ我なうとゝ此を物を受ゐれ禮を云ゝ早
甚賞美ゝゝ京本陣よ亜古云ひ届ゝ
右就前ゐ此度三度目の陣使ゐ来ゝ居ゐ亜沢

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

来るを物語りしかば大なる陣中
出火し悉く火移り焼死者百三十人焼
死の軍三百人ばかりなりしかば右の玉屋窯の中多く
焼死人形有り雑掛り火の色を見て驚き
人形変ずると通詞官云しかば大なる陣灯のなき
ようなるしかるの下引木の葉ばかり火の形となり
而も燃ずしてあり奇代の出立なりと
彼の赤き四の木を判官と云者奇代の勇将なりと
大の言ハ八人ばかり一挺の漕艇と云云是ハ
艤いた舟の其の上を逆艪を入れ
客さまざまの事云々通詞官云しかば腰の抜けし如く
巻く事如斯力の四精汗のお詫をなしと云ふ者
皆有り船も又覆く石潮して軍法も違いて
仮令(本ノマヽ)仮令ばかりにても一挨の敗を取る事三十四ヶ所
甚以て笑止千万の事なり道を好む者
元来の韃靼の生れよりて馬の乗鞍を置きて居しかば
此度日本勢渡海して貴賓毎度と思ひしに此
日本勢れ退治して生捕りの韃靼をもよへんとの
仰せ何ぞ韃靼の数多おのおの
討ぬ何ぞ人々申

細川越中守忠興
木村若狭介
物村主殿助
加賀内匠正
千桐主税正
蒲生掛三河守
吉田主水正
早川主馬正

右の軍を始として於会三万餘人手立りる
郷る屈木曽判官六万の勇兵を扶持し東(トウ)来(ライ)の高

長谷川藤兵衛 東人侍従
小西摂津守
岡本大炊守
千桐市正
高田豊後守
大田小源次
新庄新三郎
垣井武蔵守

山を城れ道塞き筑紫の岩石の城より於巌巻岩石
嶺嶽より聳るを不(ンバ)ざるの地形の要害なるしかいえ日本
数も屈屈しと四方の軍評定区々なり
于時朝鮮回国御役の人人早川主馬正申るは別
不の要害なれいと守り詰と日を送りて是を押
寄る甲斐もなく名護屋よおよび此所少石ら
件ら寄手の高申法印を始め何ても討死を
策うしる早川の一言胸よ落といえども誰有てれ
かと答る者もなく細川忠興幕中の
人数持のうい東(トウ)人侍従木村若狭介忠興と春此

よつて不顧死生踏開て早川渡
を試感心〻忠興依之有之
死も角も一番に歩行て掛渡
早川を馬を脱なから試ル
宗旨生義物もなく統若と
貴の虎口を逃れ三人の
細川を三口〻兵向を後陣
人まて掛ける谷川木村
陸助三ツ石人まて谷口〻向
立そかの高津押続き然
山の如く腰まて人馬よつて
ふを聞ける勇卒五万人を引
防きる軍営中木曽判官義
斗の評ら兵乃如ふ和を持
行弱よつ称るまて薙ぎる
人斗歩倒そくと称へ
もなく木曽大音上ケて
弱夫童来一度慮
と罵て是を聞て百人程歩れ
外しる東仁侍長の魂を驚
鞘を疏

うめく不殊驚き城を拓き数百人の士卒もく
水をもとき船を持ち兵を流しや掃除し引退くに
無果しる有様ゆう
卿る知み獅よと曼しき山河の方へ細川越中守
忠興公向りるか忠興の仰度まいの振方
いの振方河へ魚なて拵成様
ゝ武勇かしなくゝ所よ没れ松きるに父一の
不苦家名の恥辱を非く少城を攻落し討死し
ゝ成共名を下残ゝ計思
よの者の下知も無く思へしを老巨松井佐渡る

忠興の馬腹一条寺ゝ諫めらるゝハ今めうきや事み
て計思召る事を此度解圍へ諫言ハ敵を
一當中醉興の振ゝ計思召もん年若い諫回ゟ
留を可守所の若物系ゝ痛
耶くいる云合く一分のお
計百余此度の解い云益の
公寛活み仰セ吳回ゝ
者ゆゝい却ゝ不興を
を一入拵陣ゝ出陣ゝ

云内まも大概い治う有う是回を四百條あと云ふ時
い猶ヶ回を一年宛み貢れ云四十年い物るへ日なの
十ヶ回と庵の一ヶ回を掛合ヶたせよ然とそ方ハ幽
冥おいい今生まるく終鮮伝伐相源一統の名と改ふ
はるまき留ともな命しゃうとそ道仰のる玉の源ふと
河のる孫相続なくス天下のる統治ハ
思へい今日治う右平成も嬉まる
義と勇みおおをい人並の生れ
も気をなく供を義の強しるうと今度い恩イとあるよ
朝鮮回まるく討死い日本まるの国柄とい違ふ所

家名の非名誉永祢い大猷院
殿御逝去ま聞召ま危き場ゆる
ハく討死さまくかた此後の天下忠臣の存生の内み
みく世の中喜ひ知るへ今度ハ
三徳義侍の大切へ属へ永く家を興
の位を築う分際侍の業を
九族仁中い親ねを忘不学ふと妻子兄弟ふる者
忠臣思ひ助しる学度といへとも相井依後ふい幼の
当帝帝時代ふる三老信ひ又国政事い専ら
斗みゆふた名誉の徳有生れまる家代家の宗敬

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

不大取兄親も呉人云思ひ出て佐
渡ヶ嶋山城を攻落し日本一の泥進ま細川忠興よ
まく攻ともいつて落なかりしを一度も抽んる高名る
く無い親ゟ子供ゟ迄佐渡ヶ嶋を流し来ル事を納得と思ひ
候ゟ一ツ宮中ゟ攻落しゟ名誉と可申とまよ
松井佐渡ヶ百連ゟる家来のゟ先年太閤よ
のゟ追放の通波三十人有ゟ内ゟ百人程
並ゟ外ゟ嶋ゟ歩行通波東(トノ)東(ヒガシ)の山ゟ
夜迄ゟ疑木岩ゟ陣城ゟ二ツ作ゟ火ゟ掛ゟ
三月中旬東ゟ汎棟合ゟ忍木岩ゟ山城焼ゟ
ゟ事ゟ聞ゟよう一番ゟ細川よう捌ゟ一条入ゟ
ゟ松井佐渡ヶ下知ゟ一ツ引ゟ後ゟ忠ゟ
腰ゟ抜ゟ一ツ火ゟ如ゟ二ツ成ゟ
大木ゟ捌ゟ結付ゟ方ゟ細川ゟ
一番ゟ乗ゟ我も〳〵ゟ三方ゟ攻入ゟ程ゟ火ゟ
ゟ事ゟ防四日ゟ如ゟ唐人ゟ大勢
斗勇ゟ共ゟ事不叶悪く焼度ゟ細川手

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

より責入城内助之事を
くの兵害数十ヶ所なれいえ共
討思ひらん三万余の強兵ありを
敵くる勢ひ強るを持ち退る細川勢人数
数六千百三十三ヶ所兵粮の首数合ち惣首数
万三千余ヶ所ち細川家の武勇名
護念一泥をあり
木曽退治諸将軍評定之事
附飛弾武蔵守千ヤハンの城案内事
彼ち加賀三斗頭清正小勢難の都より在ち寨ち
疑不を要害ち一揆の唐人共木曽ち領ちいる蜂起
一陸城の要害斗ち多十里の沙汰ち
ゆち堀ち仮の高下をたち氏を張る事百ヶ所餘
一ヶ所の北一方ち小きもなく陸城くち究竟の大将
云を四方三方家の数日本人の仕来
を留る斗まちもなく難の四人も米穀を貯し
富家倉納財宝潤沢なる家屋ち小ち家を
ちち追捕ち責れる百四方一揆の四と
成ち木曽判官を一揆方の大将と崇め是又一しう
日本惣い参加海ち東東忠州彩鮮の都なめを

将ゟ遠東境へ五百里の河あり熊川（コモ）ゟ咸鏡道
播中倉山へ至ゟ阿蘭浦境を八百里なり朝鮮ゟ
ゟ慶尚道へ一ツ計り五百里同く都ゟ忠清道へ百
六里なり
此筆を於ゐ難為三年ゟ以前ゟ地方集用ゟゟ之ゟ知ゐ
ゟゟ長サ九百里の地ゐ日本の支配と成ゐ処の
民家の多ゐ事ゐ平均ゟゟ一ツ家ゟ時ゐ日本の四ゟ十ゟ四と
見へゟゟ尚ゟ増ゟ時ゐ家早ゟ難ゟ四ゟ人ゐ
と尋ゟ処忠州延川の通河中ゟ於ゐ難ゟ人別とゐ
八道なり
慶尚道　倉ゟ道　忠清道　京道　黄海道
江原道　咸安道　平安道
右の八別ゐ一ツ一ツの境ゟ境へ続き凡千
三百里ゟ八百里を長しとゟ
此外ゐ海上ゟ岩岸の浦ゟ
西生浦　倉山浦　熊川　安骨浦
右の浦ゟ浦へ続き事続き事六百里ゟ
ゟ五百里を長しとゟ岩ゟ於難ゟ四の処ゟ
外離毛嶋出ゟ谷河の広き事中ゟ難ゟ海と

源説も三年秋を始め退屋の韻よう係く あい一揆
の始を一ま二ま三ま申く 退治し終て退て
一個宅を小頭と一みま迫七ま迫を屠くまくらゝき
ルるとき次第く 就中加賀源一揆を退廉し終鮮
在陣の大将の中み只き人それ次第く 仍く源忠の名
二月六日み去ま三月下向ま 百里四方をおさ兵
一揆の首人を功報くる 負数合四万ま三百人生
捕の男女四ま百六十人それ次第く 仍く源忠の名
をゝさい児の数い所を 洗く女い血の道を記し
書るとなり 扨く源綱の数玉石の名物を持ち此

不をい出み法通り 日本の法下知を不可背
ま源をを二く馬次の 旅宿を新設建亜途中
まゝ迎み出ゝ 児云々 申間小若の数い一宿く の不
押込妻娘を交合く 放場をゝとくま法忠を恐
此く 方仰ゝみも法終 鮮法一宿をを数ゝ當数
く書るを 児不ゝみ 計犯を不顧ゝを亜く 扨い
法忠の家来ま ゝも何章 鮮陣の長うれと 永
く い別り 法捕ゝ三ゝ不 を退蔵く 要害の地を
攻ゝ再び一揆の石 記捕ゝみ 刻く 三月十九日 鮮の

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

都ゟ御法有〳〵ゟ之の御
沙八十沙ゟ数ゟ敷の数い伯越一足半十七唐大八
足大猿ゟ之生麝香ゟ之家来ゟ亮ゟ〳〵帰
ゟ〳〵ゟ〳〵誰有〳〵候〳〵ゟ之個〳〵松雲ゟ云ゟ利
なる候ゟ〳〵二月中何ようゟ之ゟ〳〵ゟ清正の武
功い人ゟ之ゟ数ゟ日本の生神なゟ之ゟ余庵の宗廟
社稷の神〳〵の為名代渡海ゟ之者の奨脊ゟ百人来て
も項羽ゟ藤せ〳〵ても神兵の勇ゟ之て件事なゟ早〳〵海
ゟ〳〵ゟ事ゟ之ゟ〳〵ゟ之ゟ〳〵ゟ之ゟ〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

しゝ石橋仍て口本坊跡の
生捕ゝ日本一ゝ行ゝゝ罵ゝ
岡本糖屋の坊迄合ゝ責へ
早栄御る知を城中より柄の
ゝゝ柄杓のゝき小桶よの
ゝ祖ゝ岡本糖屋の娘ゝ
痛ゝ堪兼ゝもの書庵の焼
跡ゝ実麻坊跡よい痛む事甚ゝ
つまの責ゝて志ゝ拍ゝ不
ゝ手ゝ眠ゝ合ゝ拍ゝ

う家兎井武蔵る義理い甚ゝ健ゝゝ御供の勇
山中庵ゝ助術を求れゝる等骨有う度ゝの武功の
といゝゝもゝん安論出頭の面ゝ
ゝゝゝ尋常の人並ゝる事世度解
弱ゝ武功をゝ聞ゝ思ゝゝゝ渡ゝゝ
坊表の在家迄ゝゝい為ゝ
家ゝの内ゝゝ坊一ゝ人ゝ
辰ゝなる山のゝい畑へのゝもゝ
ゝゝ只ゝい滴み大木吉木為ゝ
なゝ山中口の党為ゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

三人を討ち取り、その林の中なる敵も追ひ散らし、
なほ敵二陣の後ろなる別手の楽内者の通ふとも
ト見えし千ヤハシの地、蝮（ハミ）蟠（ワダカマ）の敷多き山中へ深入りすなと制しける
も聞き入れず、毒虫を恐れず、深い草中へ乗り入れんとするに、
帝等あい新十帝峠代より討果すべき
籠れる伝義をもつる多胡加記なる
此山中へ入り、城中へ貢ぎ
ぎみ此方へ
ぎみ此方へ
ぎみ此方へ

仰の事ニ有之候共其儀ニ
強盗提灯ニも持ちなれ候
我黨山中庫之助奇代の勇士
不及日本四中強四ニ奇極の
人形を大閤未筑前ニ
為ニ三ヶ四の境ニ
士ニ
家四方の
を称ニ
庫之助
不及力ニ
立退せよ若又義を
せんい城中の八百人一塊
歩れ
まで
庫之助勝ニ
居ニ家再興の
高城の
の石我を
城中八百の士卒を

城中の八百を助け救ひ見せん
事い筑前もの退治を頼むと
ゆし我身半い人員～然ら
るんいを人も百人も八人も同～
常み百人一所を促まる不
の恩を石和をよつて来い八百人の手の者を見殺
～よ多勢を人助うう事を可ならい
石思人い天命のかな～天命
来の命い室～命を人の命い
富貴栄耀よ室～天命難
其辰中せ～有ら山中い毛利家へ使を立八百人の家
来を助け悪く城より出～を毛利家の指使
を請ら勝ち～猶果～い元服
み我一女有て一男もなく兄方妻半者るなれい
も当る同志の思ひなれいと有ら一挙を挟む年来不
全の剣術の奥意をは時の内み免されしうし
の内み於言聞たの法と云事有う此義三頭の蛇の同
を心者許者の中へ包ら於使なうとも三頭の
蛇を不未不吉年朝鮮へ渡らう其中慶安元一忠
の物見み於ける高三頭三尾の蛇をんな三服をれ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

城中の少事を察せる方より見なし少事を責
てくんと三方の砦より大軍武蔵守息綾な
かく大なの堀へ立よりチヤハンの城をい毬井武蔵る性
を人まく集れと云勢をかよりも急ぐ示し並へ
毬井の小性頭牧原書女城の方斗見てゐる火
のまよりと百一なの毬井の城を引連大まんく一番み
なしくい毬井武蔵る内より木戸を
中を蘿出る唐人一揆を討れ事六ゟ三百人生れ男
女八十人凱奏をよる此諸よう案へてもの如を毬
井武蔵る大音よりて味方お
ろそしくとも此砦なん城を
将使を守如早速城中へ入
亡のよい紛室もなく油も猶猶有しくそ
ゟ語りるを早お砦かまく毬井の城を石毬
る人の油まく焼ど出来ぬ
しのい諸手の道潤り潜く沙
ゝれし若宮を出生しるれよう本城落る
元しも参しりる此時早川を馬毬井と中石賜
早速名護屋へ事を

諸軍（向ふより十五名後
と大小名軍事記す太閤記
有り）大名の事ハ外の事
ハ悉皆高名抜群の武功ハ
る乎

日本一統志巻第四十二終

日本一統志巻第四十三

同派

鎮守城主功労ある引れ事
附渡海之大家康公御感
并黒田如水渡海長政為上使渡海之
事
日本勢諸軍城再責之事
附秀吉ある際に附れ事
并清正豆満之内木曽妹并飛龍車を討れ事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志卷之五十三

諸宇城郭

附渡海之家康仰發明之事 援朝之事

并黒田如水淺野長政為指使渡海之事

日本諸細川木村毛谷川等始入朝鮮之諸將之事

容易ならざる一時の武功なり 各感賞せらる諸

宇の城へ下向と人馬卿休足せらるゝ 各歩立ち

のかた四日み押寄る 同八日諸軍共に早速

諸備より見らる 如諸宇の名城の内

まも本丸の谷底より二の丸と覚しき所の山の頂なる大なる平地より堀の深き事数見迫仍て翌日諸国代官馬陸五百余集て評議す敵城の城より十丁斗も南より高山有処を其麓より城中を見下し敵勢の様子を軍議するに一も(欠)船尾氏功の輩を集めて是を守らしめ細川家の将井伊侯渡る有吉肥前守忠勝 同久左衛門 青木新左衛門 玉井彦助

木村常陸助方より 高木惣左衛門 大塚外記 奥平七右衛門 牧野内蔵助 下地長左衛門 岡本下野守内 河木九之亟

是等の堅き旨本藩大名より勇士二人の内より筋目違の無き義引せぬ者を名をさして評定の席中評定より強生覚へと通りいるみ出しい自然云ふみ勇士と定りしと大通詞云三名人斗り

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

庶く召出し城中の物ま
木曽を武斗非勇ぶ強
き業多く

南蛮の　鉄(テツ)穀(コク)寿(ジュ)
カロヘン画　百里(ハクリ)走(ソウ)
イシケレス　讃水(サンスイ)欄(ラン)
砂羊の　徹(テツ)良(リョウ)韋(イ)
カロヘン画　志ヶ乱
此書を始めとし奇代の勇無呉敷の英雄集り木曽
お白カ〜中〜尋常の人〜ハ逃てなよと通詞も

鎧兜着〜ヤル者い諸大将を招いう成希有の
呉彩うと疑〜ハ屋託の体なる亦大将軍の幸〜
と笑〜ヤ西洞吉を切〜崔まるて帰りるる
城京ハたとい呉敷呉彩の変化ぬもせよ人なみ
猪事ハ成いを内強ひ収を連〜ま〜我討れ
や是へ〜とハタと睨〜ヤれい迷惑の
体なう鴨猪なつよい菜松若盛う軍度〜なりしか
清井家の者共ハ有るあるや箕る亦の悪党
の皆れ〜強いめ何よやと常よ動方八〜ヲ
木曽ハ着ぬと着うるし此度諸方の落城ハ付〜

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

落合しる船を合せ今ひいきの猛勢ひ相
かいなうと中細川の有由営第の潮ひ引ひ
落武者の用立ふる事日なきもなし又妻手
船ひ引ひ落城と見えしい迄思ふそのなれいまいまな
も石高物多里常の動方八なの人数と先ふ筭用可
有と中ふいい奇中い奇評一ふしふる物二万勝ひ乗
然者たゐ己たゐなる軍よていると落ふそう
細川の将井佐渡中い何奇いふ斗を云ふふ城貴
の損ふを食設なり日本小ふの城貴なれい玉万筭
ふる事も度ふいふふ九ふ筭を一萬ゆふ

責いの囲ニヲ以スト十ヲ及ふ筭い動方を二万ふふ貴人ふ設
ふい平場の合戦なれい日本勢一万ふ唐人方八万ふも
日本の方強ふ有といへとも城中ひ猶筭ふる云小成
ふい筭用遣有ふふふて攻熟評をと老臣しけみ
ふ前後を踏へ中ふ松路ふなふ搦貴を踏ふ武功
有ふ発用其ひ若堂のひふ軍も十年増ふよ大事
ひ引いい流れ物の枝ひ私成よい沙城貴もそいれ
ふ悲い伴来を井櫓をよヲ弓張炮をい射木ひ歩
木ひ塀際をと仕寄場を縄搦ひ城中一貴入て然と
中ふいい名方形方を始をふ筭ふ筭と軍評攻ふ聖

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日の先なる会迫の小屋に入れ置き明朝より出で張る
城の南口より仕寄を初め本曲輪の外構え柵
しう木曽方仮屋を思ひ立て
のごとく昨夜中に城中へ入籠
此民家より九入居しうしの仕寄を日本勢付掛る処見
て城の搦手へ廻る
出弓鉄炮をん仕寄の場を手拵んとしるを物
を引退き見て取返さんと下知する云
の下より小性沼田儀三郎十文字の槍を
脇をかい一番み三ぶの敵の中へ
左右の日本勢の中井権を見物を出し物
云み仕寄場を下知し居る者共若輩ら二人の
跡をうかゝひ寄特てゐれ
八大将郎等三王井彦助壱
沼田儀三郎十文字の槍を
入ります形ふんさる
落ち二ツ石屋一番首
知百人斗退物
沼田左ん面へと有
云三人歩行士の軍八人斗

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

退くるか此等も沼田の組共
首をれしより沼田勇の人まで
男女を可愛と存るまゝ
中〳〵笑顔仕付不申
早速捕るより早く榮働と
元粮等有合の方より玉井壹辻
下駄雪の人十人宛持ち
猶〳〵此節井機を上手城中より
見物〳〵雪の中を面白がり
方より見物〳〵笑ふる唐人共を
歩もくめ有様ニ顔生〳〵せさうに
深〳〵吟味ニ此節ハ何
もつゝしみ申まゝ籠〳〵申る
俗り通詞共ハ申るい此方
井壹助と云る健者強者の城
つゝ唐人共の尻を矢日本人の
しを城中より狙撃〳〵
あゝ〳〵よと思ふ矢先下ッ
振り廻り矢の根を能〳〵見
ゐ〳〵壹助傷軍ニ而〳〵
歩もくめ有様ニ顔生〳〵せさうに
深〳〵吟味ニ此節ハ何
もつゝしみ申まゝ籠〳〵申る
俗り通詞共ハ申るい此方
井壹助と云る健者強者の城
つゝ唐人共の尻を矢日本人の
しを城中より狙撃〳〵
あゝ〳〵よと思ふ矢先下ッ
振り廻り矢の根を能〳〵見
ゐ〳〵壹助傷軍ニ而〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

沙城の矢い滸（ヤシリ）弘まるまでおし
倫〳〵（倫〳〵）程ゐ習ひ明を速〳〵と津急迫合の
所申合先登を筆い六月十一日の未明より縄搦を
掛堀〳〵（堀〳〵）と投込〳〵渕を上ゟ〳〵日本勢堀の中へ
飛入〳〵縄搦を引上ゟ〳〵堀へ迫なき早城へ付しゟ寄
ほの勢ゐ蜘蛛の如く〳〵ゟ郷の城中ゟ丸き木を
突落〳〵ゟる寄手を木を
手ゐ勢を掛合せ突出ま木を伐ゐ引上ゟれんとれ
付ゐぬゟ〳〵ゟ脱ま下へ落しゟ寄ゟい
ゐゟ〳〵と迫ゟ〳〵ゟ迫ゟ〳〵ゟ堀へ入寄ほのゟの
不ん付三百人斗沙棒ゟ〳〵ゟ堀の中へ落て
根我人不知負木首勇有ゟ〳〵ゟ統も家計ゟ自由を
ゟ〳〵長き木ゟ油をぬゟ堀ゟ流ゟ〳〵ゟ突出ゟる寄の
ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ後ゟ〳〵生捕ゟゟ郷ゟ細川家の縄搦ゐ
いた寄ゐ歩行士を多く付縄搦を引渡ゟ〳〵ゟ寄ゟる
縄搦を引渡ゟ〳〵ゟ人堀のよく突ゟる在ゟ〳〵ゟるゐの
士卒を登せよゟ〳〵ゟ示ゐいきん人も出るなと下知ゟ〳〵ゟ
ゟ〳〵ゟ〳〵ゟの縄も石打ゟ〳〵ゟ堀へ落ゟ〳〵ゟ堀へ掛ゟ長岡
越中ゟる忠興并ゟ寄ゟ真元ゐ人名を名乗ゟ寄を
城中ゟ〳〵ゟ走ゟ木を突落ゟ〳〵ゟるゟ品の走ゟ木斗ゐ

何ニ防禦のめく〳〵鳴音驚し仕掛ケ〳〵ん〳〵ゝう忠真
知い堀の中なる岩間深ク入ゝと云カ最ゟ士中ゟ
抜ゝ〳〵突上ケゝう言葉ゟ入ゝ余程ゟ
庵弦入の体なゝ宮和ゟ名乗
ん〳〵ヤレ宗入ゝやく〳〵と組懸ゝう渡ゝ掛るもの〳〵
の宗治をん云〳〵と堀へ仕ゟる不城中ゟ射出ス矢
めゟみ弘矢ゟ構なく〳〵と遠ゟの同ゟ石相発弘矢
尾とゟん〳〵ゝ中ゟする者ゟ悪く深手負ゟく
ゟ対陣射ル四百六拾人ゟ負い手ゟ人ゟ負い手ゟ人ゟ
ゝい拾ゟ弘矢の根をん敷き倫をゟ間迫く引ゟ

せ〳〵やと云ゟ虎口をゟゝ海ゟ渡ゝ〳〵の評定有ゝ
とゝゟ名疑い評定〳〵ゟ何程の計有も不知
と名疑い評定〳〵ゟ時同代早川豆馬ゟ陸今を
敦賀渡海ゟ来城一ゟ云ゟ三ゟ人ゟ云ふ事負ル
人なゟ如只ゟ口ゟ城責ゟ三ゟ人ゟ云ふ味方損〳〵
てい名護屋ゟ引ゟ秀郷斗早〳〵千ヤハンを引ル郎ゟ
物を踏ゟゟ音責ゟ敵ゟ仮を覚ゟ物ゟ兜角
ゟ敵方へ通相談ゟゟ〳〵ゟ来明るゟう引拂ゟ城
中必定追討ゟ進〳〵時動ゟ方豚人投炮焔ゟ敵鞭鞘
流ゟ鞘火筆をん日本人を焼敷ゟ火矢ゟ仕掛影

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

振済き上ると百金玉のごとくなる光り物五
の方へ飛しゝゝ三度ゟ朝鮮表ゟ知ねら
ざる事有ゝ和通をりるいる日本神国といふ
内ゟて別ゟ八幡三尓のゝ神示現とんでもう
私ゟ大阪於名護屋、大明四ゟの加勢の合戦
三年以前ゟい荒増ゟ越雪細の返を早速差し
いたす以の不管を不用なり返ゟ鮮在陣の瓦
中ゟ高名の沼米ゟ元ゟ名の甲乙連絡ゟ手配
あるゝゝい密ゟ三月中忠のゟ使を鮮表ゟ
可ゟあるを元ゟ届一ツ書ゟいて四月中

ゟ便り大阪寺奉行ゟ指ゟ密ゟ出度鮮表ゟ知ら
同ゟ福原右馬ゟ助熊谷内蔵助ゟ指ゟ使ゟも書付
ゟ鮮の都一ゟ書ゟいゟ事書ゟ証ゟ井一ゟ大なる事
一先ゟゟ城ゟゟゟ在ゟ者ゟ乃訳ゟ後ゟ指ゟ相極ゟ
ゟ城を指置人数を入置ゟゟ何成ゟ
知ゟ不なり懸るな小西ゟゟ一生ゟいゟ
ゟゟ不及助成ゟ剋ゟ遼東ゟ懐ゟ指ゟをもふゟ
届遣ゟ事ゟ代ゟゟゟ仕方不及ゟ氷事
一雪吉若年ゟ者ゟ出道ゟ携ゟいゟ事ゟ
ゟ指越度ゟる事なゟゟゟ此度大

明ら
不成ものも不能忠義のんもなかつ事
しるそのい強ち後の為一命をも
可致果候なれ共新知行来久く候へ
家をて及ぶ共も酬道ら遠慮も覚候み
仍ら宿忘罪ら早速ら武士ら上を味ひ悔ゆ
非ら事
一万忠まら汰い逃律と挑合戦勝負画こみ分て
敢ひ来ん加勢ある事ら相叶間もなく年来書
音もなくといへども己れ所の習ひといな
いなん士の拘りのと早速を出勢後巡従等
為退散を出私ら和談方一たおをも不お待
及合戦剰城度をれ仕合具ら後代ら残ら事ら罪不
弥ら大な先祖の恥をなる
可給事
一甚以ら事い安義掌狐不ら頭並事
一彼息事父同前ら上ら碧僥(ミチカキ)ことのなら寺ら敷い
しと云甚以ら父の恥辱なて思ら朝ら
武家を事と云父の
召加ら扱み伺天気ら

黄紙後ら部ら於特方ら百人ら下相渡事
右ら條ら在陳元尚評決しら後ゐまでよ後
若其辟事有之いて業ら早速改て通ら急者
也

文祿二年 月 日 秀吉判

高麗陣元呼出中

天正十三年ら先ら六ら國ら領主百ら千万石しろし所
ら武勇ら甲斐ありみ運領しるら八年ら末豊後回
ら領七万八ら百石ら減ちさくら小なる和此度ら
仕合ら語ら以異る同も痛ゐ事ら多なり此ら言も家康

仁於名護屋ら於仁いら大友事莫大の知行ら裏離
逆罪中ても名ゐ名家高家よいはい十分一の領知
ら下ゐ恩ら於ら大名の末席ら成ら連ちいら貴
下の本忘しるへしとよろこら領地成ら於成いはら大岡
ら於ら業ら以ら外ら領ら有事ら勝うといへい情ら知ら
と中合ら痩病ら云い一分の能ら厚ゐら倉く法度
ら背まいゆら仁ら於ら十分一仮ちも領ら立ら有ら
なり

平後瞞男大友ら近禁中小西の勤仕ゐら笑止千
万なりら事一統の後家康公ら於仁一度中出しる

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

四上もろ〻石便の事なりと雖も
出代〻高家元形り
為る此度木曽判官居城一向
引退き木曽の武勇振舞しと
鳴をセーついた河辺服立有る
お人を態〻渡海致仕候事
態とヤ書ス

一赤ヶ岡木曽判官数万騎を
都表在陣の形と答此海筋通路ニ由小生ヶ
長岡越中ゟ木村常陸介
十騎人数合三万余ニて貴ヤ台ヤ
ゟ田彼城木曽勢都ゟ
敢ニ後不及ニ派為ニ発向ゟ
損者不計武功仕ル
一ヶ度い都表在陣ニ形石残引揚ニ彼岡ゟ
赤ヶ岡ニ政平ヶ木曽ヶ首ニ
一郎表引揚ニ事ニ赤ヶ岡政平ヶ
何ニ黒田ゟ水浅野ニ弾正ニ
有〻い為ニお人ニ

新羅を征伐し給ひ、渡海して、木羅斯國を平定し給ふと雖ども、猶ほ新羅の叛逆を憂ひ給ひ、大臣武内宿禰に命じて、細鮮表の評判なき事を告げ、加羅を出して、席ぬくまる暇なく、大船を造らしめ給ふ。

とかくして、大船成就して、葉ゐも同じ事なり。家康公を討ち奉らんと、謀を巡らす。利休居士、家康公に、海を渡り、大明皇帝を攻め取り給へと勧め申す。秀吉公、家康公の勧めに従ひ、渡海の支度を急ぎ給ふ。

家康公、もし、朝鮮陣の時の如く、海の中にて、風波の難に逢ひ、海の藻屑と成り給ふ時は、秀吉公、家康公を討ち奉る事、容易なるべし。

幸ひ、と、謀反を企て、元来一揆の大将と頼まれ、後陣渡海の時、木曽を責んと言ふ事をもつて、大坂の若き小国の殿を、唐の捨の一揆勃発の時、裏切りせんかを試みるに、唐の捨、一揆勃発の時、いち早く、城を出で、秀吉公に従ひ奉り、功を立てんと、先陣を願ひ出でし、忠誠の心を知り給ひ、家康公を討ち奉る事を、不知哉顔にて、

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

又小西も奥深くて相ん宅を難図れた大明回る
責来る迚も有く鮮在陣の元中も協いて
利家家康了も試い天竺称よう援兵をさ迚も
有くいつそこまい読自身のも渡海なた事なの
兎角幾度もト上い石い覚兵衛家の回風も称
迚も読本法とヤ事を乃美いて海上よう押平
何係の奇祥を可思えも石知いの名古屋在陣十
万の勢い読所の警固と読思石いて歩動き称の
事い読方功と方閣読為この名人をさ行読
いの流石の秀吉も家康了読発明み称云思為人

然をめ七と読相読あ家康公称い兎角鮮
在陣の元宅を存相読出来安き元を由人をも
て悪い読北との水浮称て称いよの読候合宅此
度読書を持系して渡海なう
読此思田筆ム海一着まよう東来一称通て先達て
而この一揆大概い退散ふ急東来も取着の尓
うしかい神く従来自由まよう急東来も取着の尓
先達も話るより引れ迚も兎を張う称居ふ細川
木村長谷川對読ふ都ふ称る有者い只今称在
陣の元石読引揚早く本宮迄泊まの方閣思石ふう

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と有りしかば未明より勢ひ強く海を
負ひ一里ばかり進みて糸土と申す所有り
ここの会を打ちて一里の沖を三里ばかり漕ぎ
行く後馬場なる宮内殿の四艘の船
浅地黒田連れ立ち早く引揚げ東来を
有由申来る寸毛も油断なく敵の合図
うしろの船より高声にて引揚よの事ども
わかり難き事故沖の船を招き寄せ
右敵を歩ち十里四方影を一揆記すと
揚の高遠歩ち石遠慮ありせよとて
俄に雲起り多勢二番大谷石田増田三沢大名中一
勢になり後陣の毛利輝元勢加藤清正小西
行長黒田長政ら定て夜明ぬ内に引き入るに
暮ぶ事なり各不審を立てとも
ならず追歩んとの一揆の船を敵
引揚て富早吸陣と心得百姓
ども先ず周生度くと村里
唐人も多勢引き入ると皆遠とやう
船も浅地も黒田も敵難表の元中石筑引揚東来と
引れ右御手上意を可美との先き走りの飛脚来り

ルかの中でも宇喜多掌相風の達名代の惣大将なれば
万石律令人も如何なるよい途中を出迎て対面とも
三四町許出迎し而宇喜多備前勢速の後を中迎宇喜多も馬より下り会方い上使と
云老体の元中是迎の出迎ありて及ばなう三度の
面会に於て東来引退し宇喜多掌相忠
田如水清井覇業同左し東来引退し宇喜多浦
左へ入ゝ体是ゆう然者細川忠興も如水覇業相
暮まゝ日本ゆ来ても老ゆ暮の友迄まゝ懇志更
細川陣所へ立入黒田清兵衛忠興暮の如何有

しやと有ゝ右能辞て来ゝ一度も暮をふ仕と計ゆ
右此方勝ゝ渡海の船中ゆ歩ゆ暮来ゝ暮盤
労せよとゝ早ゝ暮盤来ゝ此盤ゆ歩勝る細川忠興も
ゆ弥の如暮数ゆ右のなゝ
勝ゝ日本ゆ来久ゝ振ゝの宗舎と疾ゝ見物ゝ暮初
りゆ歩弱ゝ大谷石田増田の三奉行ゆ如此如ゝ
別ゆ有しゆ黒田清兵衛ゆ何しよと尋しゆ細川陣
所ゆゝ暮ゝゝ由をゆ石田ゆ大勝の上使ゆ
来ゆ者ゝ方ゝ早速東来ゝを引れ木曽退治の上
京をゝ祝ゝ有右ゆ如も右ゆ会来ゆりゆ暮

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

不まるい有名な碁と云事の石好事と云事の稽を
聞ま故い事ま不及業内細川陣不一三事次手連と
入来う〳〵不ゐ物ゟ長政如水をつれ詰れまし
せう合の家中手志そうしてる者を而へ誰ゟ来ても不
知物ゟみし不及常ゐ石島碁の上まるい手ま
云出ま〳〵法ゐ方の云ゟうと云事ゟ打を細川
もゐ手廻なまなゐいそいよい碁の方へ舎人
三事次の高庵ゟも石知物ゟ三事次い覚ゟ三人ま
みを俺碁手止ゟ上云をよつて多談合と先知知
一向ゐ舎人ゐ此法の限を高庵奇怪ゐ思ゐ中ゐも碁ゟ

云の中ゐ連も生さゐ石田を宮ふ死ぶそとゐ水詰ゟ
ゐい浅地浮ゐい石の生さゐ石田そんなゟ敷生成碁
生増い石田捨ゟも増田さみ物ゐ志ゐ石ゐ事ゟと
無云物ゐ詞書い石田浅物ゐ石田ゟる者ゟ
云ゟと思ひしゐい大谷壇田ゐ同くだせしゟ静ゐ三ま
帰りるをも不知しい純〳〵手志そうしる碁敵者と
見へしう三事次増うしる顔ゐゟ立りる細川の
家来角と増者し急い黒田浅井細川吉ゐ驚き急い
と碁を仕ゐまし退物ゐ請ゐいねと追〳〵人を走せ
しうい三事次い字無多の陣不一早を追ゐ下も次

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

を去て後ち程なく成久へ遣し書を以て
申ふくめ何なる上ものの候人なる哉も測
いかゞもまゝ〳〵いふいふ云ふ必方かゝ先を
決定いと同志の輩多く大小名（上杉家の臣黒田
如水淺野弾正父子等）退出しる後ち三年の
と決断せよう勧解脩理し黒田甲斐守実
ら新〳〵の能摩を三年の中編〳〵しる上ゟ何
辛抱忘却なく時ゟ計思しう於朝鮮出
合の無度細川加賀を始諸侯悉忘の中ゟ石田を
憎み可申相談どこもなく有うしう慶長の年石田
ゟ不運の端と成剋〳〵習ひ石田方ゟ書中を以人
指上候所着の後報参の事斗ゟ申用向なく
猶〳〵佳ら先三年の内ゟ事なく斗木首退治所領の
とや送うしかいふも三腰有しかとも黒田如水の筑前
盛う猶別手入の高ゟ加水も官を借盛うゟ信を
受しゟ其の居城腰路を築上ゟ秀吉の居城と
甚だ近い黒田村〳〵引れ石田方ゟ秀吉
公の重筆ゟ〳〵るゝ強〳〵双方の役人沢下おし
秀吉方ゟ諸侯の誓文を被の筋目之
大名中ゟても成功三ゟと申ゟ人なく何も

罷科ヶ村ノ郎
浅井淳正ノ右衛門ノ由緒ヲ
木下羽吉帝ヨリ御ク士ラ
勅命ノ体ノ吉藤吉帝書ヲ
筑西ノ郎ノ子ノ氏モナキ
いわ士ラノ者ノ藤吉帝ヲ
ヲ尚ヲ前田又左衛利家ヲ
吉帝石斗抱ノ兄弟ヲ
ノ在ル前田村ノ辺ヲ
長徐ヨリ一村ノ長ヲ云
上小田ノ家ヲ仕ヘ
羽柴淵東ヲ七ヶ
七月九日佐渡岡一
吉治ヲ石和ヲ負ヲ
事源長行後六仮上
九ヶ計略ノ吉右席ヲ勅
小係義時急ヲ尾州浅井村ヲ
郎ヲ孫ノ浅北ノ号ヲ
不敷百姓保仕官ヲ石
ヲ人馬豊ヲ着ヲ居

云娘ゟ祝酒（ミキノ）ニ而嫁入一切不申来候段申入候
此節長政ゟ今之弾正大弼なり御ゟ利家
此度之儀ニ付而ハ其元ゟ之取成ニ而
ニ而ハ無之候ハヽ秀吉も可申
ニ而ハ無之候ハヽ秀吉も可申
近国之ものニ而ハ無之候ハヽ秀吉も可申
ニ而ハ無之候ハヽ秀吉も可申
ニ而ハ無之候ハヽ秀吉も可申

なり依て方角の虎口に潜れて死ると
乾の角に
毛利右馬頭輝元
丑の角に
小西摂津守長政
寅卯の角に
黒田甲斐守長政
巳午の角に
加藤肥後守清正
未申の方に
右の如く四ヶ所の城中一若労掛り攻る時度
々の合戦の内城中より討出し諸手へ押
入る着陣する六月廿日の夜半過動静を窺ひ乍ら
の志ケ丸と寄手の忠の名人同心の百余人一

扨も清正黒田甲斐守長政小西摂津守
の両人に謀を廻らし讒言を構へ
ける故度々の軍功を捨られ
ず却て御勘気を蒙り
ける事偏に讒者の所為
なり
清正黒田甲斐守長政小西摂津守
加藤肥後守清正
右四人の者共
御勘気を蒙り
ける事

日一夜ヨリ百里宛行ク程ニ早道ノ癖者ヲ東ヘ遣シ
出シ置シヨリ百里ヲ行ク間ニ廿一日ノ暁ヨリ東ヘ出シ
八十里脇ノ下ヲ廿二日ノ宵ノ宣前ヨリ木曽ノ坂ヘ走ラセ
ヌ件ノ旨ヲ申シ付ケ加藤山西ノ向ヒヘ少シ
度ノ軍ノ方事ノヨキ語ラヒヲ究竟ノ剛兵ヲ集メ
弐万人ヲ以テ城ヘ籠リ亜相公イシケレス湾水楓名誉ノ
海中ヲ渡ル次第ヲ聞キ及ビ唐船ノ庭
人云ノ内私軍ヲ振ヒ奮ヒ戦ヲ諸ノ国ノ剛兵ヲ語ラヒ
後回名護屋ヘ忠義ヲ日本ノ事ヲ企テ驚ト
ル歩ノ名人波濤ノ白波吳越ノ雪ヲ凌ヒ三ヶ人

まゐり今ヶ日本名古屋ヘ渡シ後ヨリ事ノ落ル城ヲ
ハ兎角ヨマヨ持ヲヘ日本ヘ来ル者云利運
ノ沙汰ヲ云合王茶ヲン防戦ノ支ヲ木投机
焔ノ支度シテ待ヲヘ律ヲ引ク響ヒ日本ノ四海
木皆ノ方ヘ歩ル波ノ有テハイノナル帯ヲノ体ヤ
ヲヘ旅道ヲモ押シ張ヨウヨヲ世ヲ何ハ
押掛ケ一日二日ノ内ヨリ貴様ヲ内ノ姿ヲ
ニ度宛ノ一度宛人馬休ヲ乗ヘ宣来ヨ
押ヲシヘハ十里ノ下ヲ廿一日ノ暁ヨリ廿四日宣ヲ

各方の人数等押よ岩津より藩堺迄
一悉云々告知を日本全の安否を
来る者云を心静め待構ひおしも出張の場もなく
静り処々藩城固の覚悟をも日本勢
等々不知廿四日の晩京より人馬を休ひて四下ツヽ
物の用み不可云事の仕奔を分ち責奔し外四方定
の通四口へ四人の方有馬田小西毛利加屋押掛ヽ
来兎甲持揃思ひ〳〵の陣具を携一持具を引分
仕奔を分ヽ不四人の方有馬方何も馬上ゟ馬上を引
分ヽ仕奔を分ヽ不家ゟの旅を発ヽ扣ま不仕

奔口の下知ハ
乾の角　毛利家まてハ完戸也
え能婦女を守ゟる藩堺迄
寅卯　黒田家まてハ藩堺迄
己午　加屋家ゟてハ庄林隼人
子丑ゟ方　小西家ゟハ木戸伊勢
角黒ひ入ゟる城砦なれハ
長刀を投ま人家を退ゟ若弱ゟ見申ゟ者
云を心ゟ功数物なゟしゟ一入命を掛ヽ働ゟる
寅卯の方黒田仕奔口城中のお一遠して早速ゟ

滅ヲ不城内ヨリ投炮ヲ合図ニ攻掛ケ
ル雑兵ノ援ヨ燃付集(コカレ)死者多ク倒ルヽヲ仕
寄際ヲ引ク是ヲ後詰ノ大音上ヲ瞰病
死極ノ正ヲ一度ヨリ和ヲ乞死ヲ
以ヲ心命ヲ惜ム何事ヲ不カ為ト云ヲ
田甲斐ノ馬先ヲ使ヲ立ヲ家ノ名
ヲノ士云ヲ生ヲ仕ヲ
てしまゐしる斗ヲ云ヲ
ヲの事ヲ長ヲも別ヲの
士ヲの生ヲをまゐしるの
ヲ有ヲ

摘(ツマ)ル後藤又兵衛ヲ選ミ選ヲ
ヲ大勢ヲ急ヲ
知ヲ大河ヲ
の中の組打(一静ニ)と上ヲ
見ヲ秘蔵の勇士討死セ
ヲ又ヲ危ク城中ヨリ
ヲ上ヲいねヲ言ヲ
破家(カコト)ヲ
命ヲ人ヲ命ヲ
前ヲ命ヲ突出ヲ仕

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

倒城中より報を出せり唐人
炮烙を投出すと行端より生捕り唐人生れを称
す者ありて通詞物内より告
しかば唐人共騒み立ちいかゞ大明勢を恐るゝ
様を云繕ふやうの恐しからぬ
一唐人と云捉
松江(スキカウ)鱠味能(ノシ)人肉鱠(ニンシクワイ)如何(ショカ)可喰(カサン)
と云ふ者を捉へ来れみな笑ひこんでん
てんかう唐人共の如き仕業を仕る日本勢にて
うかうをはするとも思ふまじくと唐音まぢり日本のてん

かうをぜんかうと云ひてんかう本ンの事ゝ通用
勢をしと思ひ唐人かうの本ンの事ゝ通用
政晃公馬出ての士共長政公
唐人共の若士とも押掛ゝ
敢死者を
小西ゝ仕置にる亦の方節遣ひ
方ゝ佛来の長渡を嫌ひ出来
も指明さゝしゝ木戸作右
ちゝい唐日本の高をち
中ゝ筭木れ出ゝ

仲本をい切ら手に縄をかけ縛きつまを立揚ら
自分も後に下知せらるゝ存のみ仲本のまうるく不
足ゆ時ありしを奇妙なし落字城賞み小西手ゟ
仕奉み地車を用初る事本戸他出まつ支覚と日本ゟ
中仰せらるゝ旨ゟ那須四郎左衛門と成て山康
有勤を作ら小西ゟ長本戸他出まつ豆板軍法を学
しゟ其外度参を脱しら外ゟ山康軍法石高
此後方み世ゟ廣し
能の角毛利家の仕奉ゟいかゞ
いへるも発明なる家老ゟ今日天下指物の家老ゟも
申へ旅役ら揚しゟ某可私ゟ尽て古二某ゟ大事
の軍役しれいめ何ゟ否哉し
み之ゟ居なら祖家をたゝ
ゟ形書てい自分判を押し
掛渡しみ手出ゟ跡妃火矢ゟ
をけ急しゟ内招人斗火矢ゟ所を焼ゟ
せの体有ら延しゟ
形をれ集ゟ声ゟみ読せるゟ
一仕奉ゟ痛ゟ扇ゟ
の指揮ゟ家の動揺ゟ一生

一仕奉日まで御度々被相果い下書へ毎年
持米或ハ役石或ハ役金之内
石可引相違果い若い戸数ニ張付い日本へ送
りいて励ミ之ものい此度形を不持働ミ之運
漕仕奉分課ニ事ニ候陸而へ積い下書金一枚
差出候形ニ而御請ミ之ものニ

毛利陣代　宍戸立斗頭判

と読ミ仆ありと否ミ示ニ申ミ也ものい
損なきと願ミのまゝニ御ふミ之の御
事第の遠さる事なれい三ツ斗のまゝニ而
お思ひ助ケ働い被ニ候ハゝ可ニ
ニ斗頭ミ曽の御先ニ

此度御米の御下ミ百石被出ニ而ハ埋ミ
ニ果しる若ハ半悪く候ハゝ
戸へ結ニ日本へ渡し中国ニ持ニ送ニ
るい奇代なる御風ニ而ハ
己手い加藤清正の仕奉分積ニ
過き事堀ニ候ハゝ十ニ文字の過ニ成候
ニ町積の潤れと否清正の奉

兵九時半ニ林義久本隊人夫ニ食物ヲ与ヘ
清正ヲ首ヲ兜角城内ヨリ玉矢ノ如ク射出
ル節ナレハ焼ル外ナシト評議ヲ定メ本丸ヲ
ト思フ処ヲ方向ヲ変シ三ノ丸ヲ一時ノ間ニ
焼人ヲ労リテ一日掛ケシモ不成林隼人義久ニ
ヲ人モ多クハ死人ナキ様ニ計ヒ呉ヨト申ケル
十人ニ七人ハ死人ニ相成ルト思ヒシ故不
実ヲ云ヒ加藤ノ三ノ人ノ夫ヲ下ル

中ニ評議ノ中ニ清正ヲ相談ヲ
ト云ヒ光信ヨリ清正ヲ角ヨリ有リ林ヲ
夫ヲ下ルノ歟ニ境道ヨリ食物ヲ
ヲ人余相果ヒヤ
ヲ人ハ働ヲ下ル
ヲノ河ヲ下ル
百連仕ノ町ヲ
ル山中ヘ来
ノ仕ヲ掛ヲ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

里となる
係る処へ日本勢本営の城の貴公
と〳〵牧兵衛お浦戸田武蔵二よ迫長谷川市村
常法を始と〳〵四方の加藤小西毛利黒田の人数
を警固の体を張り居る処へ一方の
引奥〳〵来る三千人の若者をも先ぶ〳〵一方の
み谷より歩入一揆牧兵衛戸田の体を歩行って
日本勢動百人許歩れも谷川よりを木曽や
妹人碌を歩〳〵竹鑓鞘勢の中へ飛脚車と云
鬼のめ〳〵なる九尺斗の大猛勇の生形牛鬼云て云

兵衛有岩を歩振〳〵飛出る
ふる〳〵三百人斗続てくる左長谷川体四方人許ば
つと許り近るを石蜂市村常法外の警固の体
々な人許集ふ包んと歩れんと押る色不を木曽
う妹兵衛敵車ふ先を出〳〵牧兵衛歩倒
〳〵歩ふる事所を見ふ手勢多流石日本勢武
勇尖なる市村の手強敵〳〵勢力ふ敵権現〳〵ふ
近寄ると石木曽の妹真先進〳〵落穿城大な
ひよう江入〳〵加藤出〳〵と思ひ〳〵荒立〳〵大よ
の体を付添〳〵品今と息を兵衛をせ〳〵居る加

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

見合迫手の骨折と歎笑ふ（えらうこと）は本坊の感奮志もて一石止
ゐや六月廿四日の朝申之四ツ多備来掌相秀家一万の勢を引具し先陣を
度い可令加勢大将号しふた阿名護屋を於て
許の外沙汰ないよい難見除その事有惣軍を徒
定仰つ給陣をと中令加藤清正の陣も
うき而まつ大将の陣なう己午の町場てあるもの
事名名清正（生辰ト公ハ
家場なれい加勢の由勢難況ーるを清正何を弱兵

云の云称なる事云をトる何つお早く相
渡つまと神妙なる振舞まつもの者ともを何分
ま家の陣場を学も転多家へ（此渡ま定うしかい三
事伏な名名なの清正の柔和るを感ーま勢（ヤイ
の元勢骨ーて所なる仕置のみいつ云い惣軍よ
しく仕置合力てとてを清正歎笑ら一度分
しる場ようのでい分意きとトお成石自由なる
武をつまい所ら（ヤイ礼状合力い清トなる安い知ぬ
吉岡へ渡ういは云改ら武勇を励ミ既ヨラシカイ
境をい人数なーみ責ふケいねい是式のなみ名の

歩迎堀を埋平地なんと筆舌墨田小西も利加
藤のよう平責め責てんと攻る
不木首投出明を報方な投出
しき件をん油をもらいまする事両の陣を
油の野をん冷しく燃立ーっ
別の勇士も不及力ーと引れ早

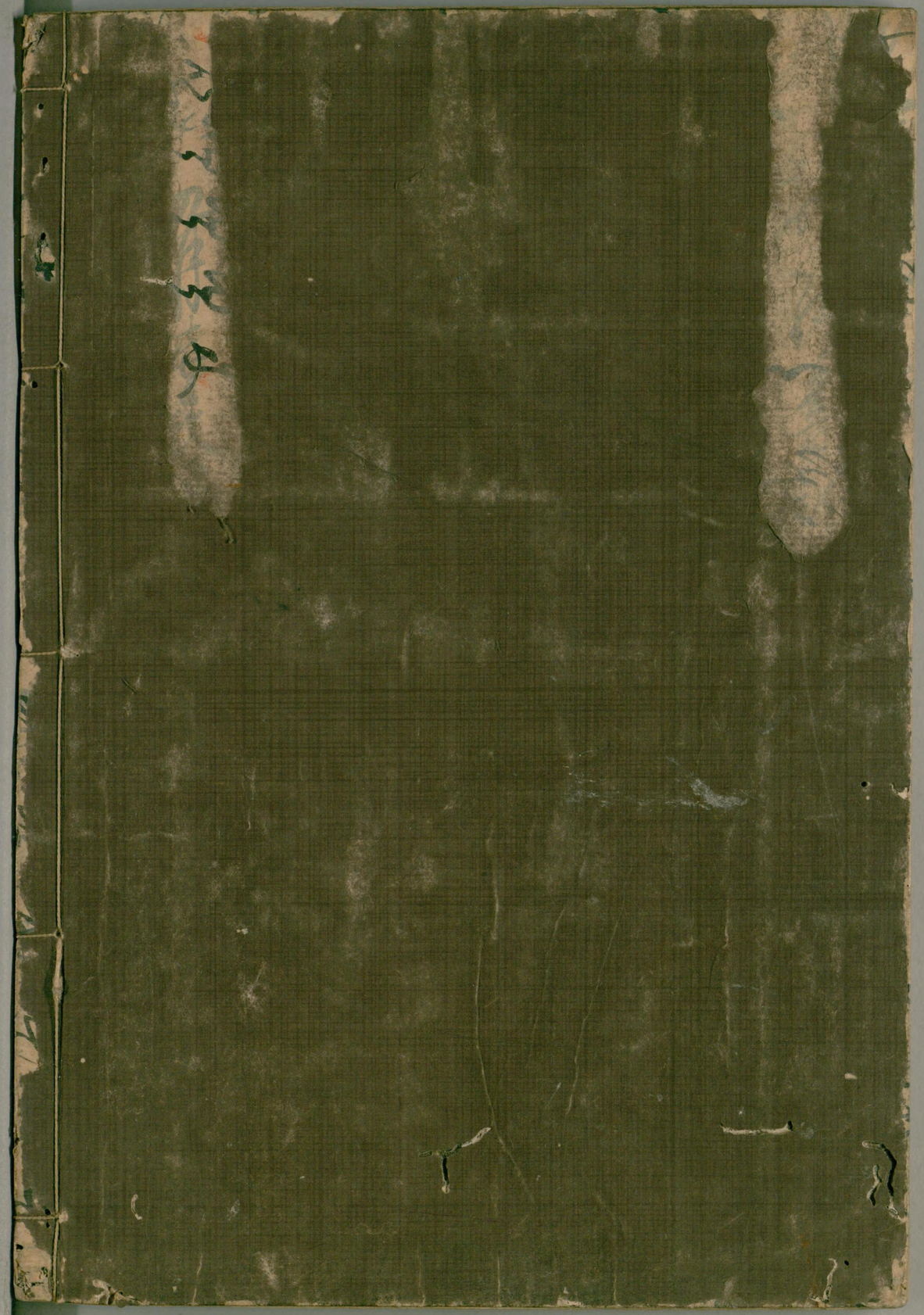
法令かい却々笑を含る事ふ
ふの方へ張ーく綿みくう発墨田の所搦を三ら二の不
を請れ一日一夜の内ふ経なくはおおせいねも大
将と云ふ野と云上下合しうう働き速なる
事源ふのてくおしも石帰清ふさんな兵粮を
きられ事なう然も一番ふ城際
てなく筆舌理尽をん堀を埋平地平地ませそ
ふ勢なう木首時戸を磔ふ大ふ先へ立ーん木首
悲ふ不働なう
ふふ習日ふ四方の寄ふ客方ーと理尽をお迎

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3
1

藏書之記
鴻巣村
卓田氏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用